

魯迅と高長虹

山内一恵

はじめに

廈門の時期は魯迅の後半生の生き方を決定した重大な時期である。長いためらいと迷いから出て、魯迅が許廣平との新生活を決意する一つのきっかけとなったのは、高長虹（以下、長虹と略記）との論争である。一九二六年十月以降に展開された魯迅と長虹の論争は、一方的に魯迅に罵詈雑言をあびせる長虹の攻撃に對して、心中の怒りを抑えきれなくなつた魯迅が反撃に出たという圖式になつてゐる。だが、一九二九年十二月、『高長虹文集』の刊行を契機として、中國では、長虹に對する再評價、特に二周（魯迅・周作人）と長虹の論争に關する研究が進展をみせてきたようである。

本稿では、まず魯迅と長虹の北京での『莽原周刊』の發行を通しての交流から、魯迅にとつて長虹がどのような存在であつたのかを考え、その上で、長虹が魯迅を攻撃するに至る心理的経緯を考察し、廈門時代に魯迅の實生活及び思想面に大きな影響を與え、「進化論」からの脱却を迎える、後半生への轉換をうながすに至つたことについて、魯迅と長虹の論争を中心にして述べようと思う。

『莽原周刊』發刊と高長虹

一九二五年四月二十四日、北京で『莽原周刊』が、魯迅を編集人として京報館から創刊された。發刊時の主要メンバーは魯迅を中心として長虹、向培良、荊有麟、章衣華ら文學青年四人である。『莽原周刊』の發刊が可能となつた要因として、次の三つの事柄が考えられる。

第一には、當時の魯迅をとりまく社會情勢が魯迅に雜誌發刊の必要性を自覺させたということである。魯迅の社會情勢に對する認識は『兩地書』の中でより具體的に語られてゐる。特に、一九二五年になつて表面化する女師大事件を含む北京の教育界の情況について言及されたものが多い。その教育界の情況については、當時の新聞に掲載された記事からその一端を窺うことができる。それらは、魯迅の認識の背景を表す情況であると考えられる。そこで先ず、『莽原周刊』發刊に至るまでの教育界の情況を、新聞記事から概観しておく。

女師大において、學生と楊蔭榆との衝突が顕在化するののは、二四年秋、學生數名が、楊蔭榆によつて退學を命じられたことに始まる。その結果、學生の公憤を呼び、二五年一月二十一日に「國立北京女子師範大學學生自治會宣言」として、「驅逐楊蔭榆第一次宣言」が發表さ

れ、楊蔭榆校長就任以來の罪狀が列擧される（二五年一月二十三日付『京報』・「女子師範大學風潮之擴大」）。以後、二月一日に「驅逐楊蔭榆第二次宣言」（二月二日付『京報』・「昨日女師大學生招待新聞界」）が出され、二月十七日には女師大學生自治會代表が教育部を訪れ、楊校長を否認する宣言文を手渡している（二月十八日付『京報』・「女師大學生自治會」）。

三月に入り、北京の教育界は王九齡教育總長就任に對して反對を表明、十六日に武裝警官と各學校教職員代表が衝突する（三月十七日付『京報』・「昨日王九齡赴教部就職被阻」）。一方、女師大以外の北京の國立大學でも校長をめぐる問題が續發していることが分かる。北京師範大學では、累積した教育經費未払いのため、校長范源廉が辭意を表明したことに對する慰留運動が起る（二月九日付『京報』・「師大教員學生堅留范校長」）。工業大學では、新任校長馬君武が教育經費の不足から學校運営に困難をきたすとしてその職に就くことを拒否したため、學生側が教育部と馬君武兩方に就任を要請する（四月二十六日付『京報』・「工大學生催請馬校長就職」）。また農業大學では、教育部令で張伯言を校長とすると傳わるや、學生全體大會が開かれ、全員一致で拒絶を採決する（四月十五日付『京報』・「農大風潮之前前後後」）。そして一月三十一日、美術專門學校が閉鎖される。二月二十七日『京報』・「美專風潮紀實」には閉鎖にいたる經過が詳しく出ている。これは、女師大閉鎖の先例といふべき事件である。

以上、校長の慰留、校長就任の要請或いは新校長否認の問題、教育部の教育經費未払い問題、教育總長就任反對問題など、當時の北京教育界の情況の一端が窺われるのである。

又、魯迅は『莽原周刊』發刊の一ヶ月前に徐旭生にこう述べている。現在の各種の小週刊誌は、量も少なく、力も弱いのですが、小集

團或いは、單身の白兵戦をやつていて、暗闇の中で、時には匕首の閃光が見え、仲間の者たちに、なおも誰かが古くて堅固な堡壘を襲撃しているのだと知らせてくれますから、廣大で灰色の陣容を見るよりも、或いは逆に會心の笑みを浮かべることが出来るかもしれません。今はただ、私はこの種の小出版物が増加することを望んでいるだけで、向かう目標がほぼ同じようなものでありさえすれば、將來はごく自然に連合戦線が形成されるでしょう。（三月二十九日）

實際、上述のような北京の教育界の情況は教育部に身を置く魯迅にとつて切實な問題をもつていた。それ故に、そのような現實を打開しようとする社會の微かな胎動を實感していたことであろう。その打開のための第一歩として、魯迅の中に『莽原周刊』發刊の必要性が自覺されていったと考えられる。

第二には、魯迅自らが實際に『莽原周刊』發刊の準備を進めていたということである。三月三十一日『兩地書・八』に、魯迅は更にはつきりところ書いている。

しかし私はどうしても、根深い、いわゆる舊文明に對して襲撃を行い、それを動搖させ、將來に萬分の一の希望でももてるようにしたいのです。それに注意して見ると、なんと成敗を問わず戦おうという人が何人かはいるのであります。意見がごとごとく私と同じようなものではありませんが、これは數年前には出くわさなかつたことです。……もしあなたも鬱憤をはらしたければ、我々を手傳ってください。

「戦おうという」「何人か」とは、上述の長虹ら若手文學青年を指している。また許廣平に「我々を手傳ってください」と誘つてゐること

から推して、『莽原週刊』の發刊がその時すでに決まっていたと思われ。では、何故、魯迅は『莽原週刊』の發刊を決意したか。長虹は『莽原週刊』の發刊は『狂瀾週刊』の停刊と明らかに關連がある、或いはそれが主な原因であるともいえる」と斷言している。長虹編集の『狂瀾週刊』が北京で創刊されたのは二十四年十一月九日、二十五年三月二十二日、第一七期を出して停刊している。長虹はこの一時期、『世界語週刊』の編集にも參加している。長虹は孫伏園から、魯迅が『狂瀾週刊』にかなり關心を持つていと聞き、魯迅宅を訪れた。二十四年十二月十日の『魯迅日記』（『全集』十四卷 以下、『日記』と略記）に「夜、風。長虹來る。『狂瀾週刊』及び『世界語週刊』を贈られる」と記されている。これが、魯迅と長虹の出合いである。

これを始めとして、二五年當初の『日記』によると、長虹が魯迅宅を訪問した回数は、二月に四回、三月に八回（うち一回は手紙）であることが分かる。更に、三月の『日記』には『狂瀾週刊』の主要メンバーである弟・高歌、向培良二人の名も見え、これを加えると、三人が魯迅を訪問した回数は合計十二回、出した手紙は三回ということになる。ほぼ二日に一度の割合である。『狂瀾週刊』の停刊が三月二十二日であるから、三月初旬か遅くとも中旬頃には魯迅宅でこのことが話題になつていたのであろう。その具體的内容を確かめることはできないのだが、要するに情況として長虹が云うようなことも考えられる。魯迅は「戦おうという」「何人か」の一人として長虹と出合ったといえないであらうか。

第三には、京報館が『莽原週刊』を發行することを承諾していたということである。四月二十二日『兩地書・二五』で魯迅は、「このことは、もともと一つの計畫にすぎなかつたのですが、圖らずもある學

生が邵飄萍に話したところ、彼はすぐ廣告を載せ、しかも、あんなに誇大なおかしな書き方をしたのです」と述べている。邵飄萍は『京報』の創立者で、當時いくつかあつた『京報』の副刊の改革を進めていた。その副刊の一つである『民衆文藝週刊』の編集を擔當していた荊有麟は『莽原週刊』發刊の計畫時からのメンバーでもある。當然、邵飄萍の意志を知りうる立場にいたであらう。魯迅が「學生の一人が邵飄萍に話した」と云つてゐるのは、荊有麟を指したものと思われる。上述した三つの事柄、すなわち二十四年末からの魯迅をとりまく情況に對する魯迅の認識の深化、長虹との出合い、そして京報館からの刊行物發行の誘い、これらが同時に作用して、『莽原週刊』の誕生を促したものと考えられる。四月十一日の『日記』に「夜、酒を買い、長虹、培良、有麟を呼び、ともに飲む。大いに酔う」と、『莽原週刊』發刊を正式に決定したことに對する喜びが長虹らの名とともに記されている。魯迅と長虹とのかわりはこちらから始まる。

未名社同人と高長虹

このようにして發刊された『莽原週刊』は、全三二期を發行して二十五年十一月二十七日、停刊する。その後は『莽原半月刊』（二十六年一月十日創刊、二十七年十二月二十五日停刊、全四八期）が引き繼いだ。編集者未名社編集部、發行者未名社出版部である。この『莽原半月刊』に長虹は參加していない。それには、魯迅の長虹との訣別、長虹の魯迅攻撃が原因として考えられる。

『莽原週刊』は「全部で三二期出版され、發表作品は二六〇篇、その中で長虹は三四篇を發表し、首位を占める」。又、魯迅も「最も奔走した者が、高長虹であり、中堅の小説作者としては、やはり黃鵬

基、尙鉞、向培良の三人である。そして魯迅が推されて編集者になった。しかし應援者は思つていたほどに少なくはなく、小説では、文炳、沅君、霽野、靜農、小醜、青雨などがいた（『中國新文學大系・小説二集序』三五年三月二日『且介亭雜文二集』）と述べている。このうち、黃鵬基と尙鉞は、『莽原周刊』發行期間中に長虹の狂飆運動に参加し、長虹が上海で狂飆社を設立してからの主要メンバーでもある。長虹自身も「私用があるが、大風大雨であらうが、編集の前日に原稿を持つていかなかつた週はなかつた。私は命をかけて『莽原周刊』にたずさわつた」と自負の思いを述べている。事實、二五年の『日記』によれば、長虹が魯迅宅を訪れた回数六四回であることが分かる。同じく二五年の『日記』によれば、狂飆運動に参加した「中堅の小説作者」黃鵬基は二回、尙鉞は一三回、魯迅宅を訪問している。一方、向培良は『莽原周刊』發刊前に北京を離れ、以後十月まで開封で高歌と『豫報副刊』を編集している。他に、發刊準備に参加していた荊有麟は、『民衆文藝周刊』第二期（五月二十六日）からの編集を一人で擔當している。つまり、『莽原周刊』の發行に關して、長虹が最も足繁く魯迅宅に通つていたことになるのである。

『莽原周刊』の原稿を擔當していた者について、長虹は「當時、名をあげればみんなが知つてゐる人たち」である。尙鉞、常燕生は私が推薦した者で、高汁鴻の原稿もみな私が持つていつたものだ。一方には、李霽野、韋素園、韋叢蕪の數人がいた。『莽原周刊』は實際みんなの仕事であつた」と書いてゐる。常燕生と高汁鴻も狂飆社のメンバーである。李霽野、韋素園、韋叢蕪は未名社の同人で、上掲の「中國新文學大系・小説二集序」で魯迅が云う「應援者」である。その李霽野は『莽原周刊』との關係について、「我々はただ個人の名義で投稿

したことがあつただけで、高長虹らその他の投稿者とはいかなる社團關係もない」と述べている。要するに『莽原周刊』は魯迅を編集人に、長虹ら狂飆社メンバーを主要執筆者とし、更に未名社同人を含めた「應援者」を執筆協力者として、運営されてゐたと考えられる。

未名社については、李霽野が『魯迅先生與未名社』で詳しく書いてゐる。それによると、同人のうち、李霽野、臺靜農、韋素園、韋叢蕪は安徽省出身で小學校時代の仲間であり、曹靖華は韋素園のモスクワ留學時代の同級生である。又、臺靜農を除けば、みな翻譯に従事していた青年達である。仲間意識も強く、結束力も堅かつたと思われる。未名社の正式發足は二五年九月中旬であるが、北京にいなかつた曹靖華を除く上記の四人は、八・九月頃から頻繁に魯迅宅に入入りしており、當然、長虹とも顔を合わせていたであらう。當時、魯迅の許には未名社同人と狂飆社メンバーの二つのグループがともに入入りしてゐたのである。ところが、この二つのグループは魯迅を介在してもお互いにぎくしゃくした關係であつた。長虹は李霽野らを『莽原周刊』の共同工作者としてみており、二つのグループのしつくりしない關係を内部對立としてとらえていたが、李霽野らはあくまでも、自分たちは、個人的な投稿者にすぎない部外者だと考へていたようである。

この間、未名社設立の準備作業が進み、翻譯に携わらない長虹が今度は反對に部外者の立場に置かれた。その頃、魯迅が編集してゐたシリーズの一つに翻譯を收めた『未名叢刊』があつた。當時、出版社にも讀者にも翻譯ものを嫌う傾向があつて、『未名叢刊』の賣れ行きはよくなかつたが、素園たちが、外國文學を中國に紹介することに乗り氣であつたので、魯迅は『未名叢刊』の運営を未名社同人にまかせた。魯迅は『莽原周刊』では「批評」、未名社では「翻譯」を中心と

して、兩者を同時に發刊することを考えていたようである。そこには、魯迅の「創作のできる人はもちろん創作をする、でなければ、作品の翻譯をしても、紹介をしても、……よろしいのです」という「天才を育てる土壤」(同上)を作ることへの執着があつたものと思われる。しかし、長虹には、「翻譯は重要であるが、創作はもつと重要である」とする創作第一主義と、翻譯と批評とは、「私には批評という仕事ができるのだ」とする批評に對する強い自信が存在した。それ故、長虹はその魯迅の方針に不満を抱き、更に魯迅の關心と援助が未名社同人の方にのみ向けられたと誤解したようなのである。長虹には、『莽原周刊』の發行に對して相當な自負があつただろうし、その功績を魯迅も認めているものと考えていたであらう。だから、未名社設立の話を進めている魯迅と未名社同人に疎外感を抱くということもあり得る。それは、未名社の設立から十一月二十七日の『莽原周刊』停刊まで、長虹の魯迅宅訪問は、十月は四回、十一月は六日の一回だけであるという『日記』の記事にも反映されている。又、『莽原周刊』最後の四期には連續して長虹の作品はない。更に、『莽原周刊』を『莽原半月刊』に改める時、「あなたは私に編集するように求めたが、私はあの時、恐ろしくしてお断りしたのです。あなたは説明して下さいましたが、私に結局編集を擔當する勇氣がなかつたのは、……韋素園ら諸君とうまくつきあうことができないからで、……友人關係から言えば、尙敏は仲間であり、韋素園は仲間ではありません」と、長虹は未名社同人との齟齬を魯迅に訴えている。

二五年九月當時、長虹が魯迅から離れていった背景には、このような未名社設立の経緯が要因として考えられる。未名社同人に對する不信が、そのまま魯迅への不満となつて誤解を生じ、未名社同人と魯迅

の關係に疎外感を覺え嫉妬のようなものも感じたのではないであろうか。この時の經驗が、長虹の一方的な魯迅攻撃を導き出すことになつたのだと考えられる。

高長虹の魯迅攻撃

二六年八月二十六日、魯迅は許廣平を同行して北京を離れる。『日記』によれば、北京驛へ見送りに來た顔ぶれには、高歌、向培良も見える。二十九日上海着。四日間の短い滞在の中で、三十一日の『日記』には、「晝過ぎ、廣平來る。長虹、雪村(章錫琛——筆者注)來る」と記されている。この日が、魯迅と長虹の最後の會談になつた。長虹はこの時の情況を次のように述べている。

私は章錫琛と一緒に旅館に彼を訪ねた。旅行の途中だったからかもしれないが、彼の感情は全く平靜ではなかつた。……その頃、すでに章錫琛とは狂飆季刊を出版する話はない。……その日の章錫琛に會つた時、彼は難癖をつけ、まず一期出版して、様子をみようということであつた。この日、魯迅はもう上海を離れていた。私はその時非常に腹が立ち、すぐに狂飆季刊出版の計畫を停止した。

『狂飆季刊』は章錫琛經營の開明書店から出版する計畫であつた。この時、長虹は出版できなくなつた原因は魯迅にあると受け取つた。この時点で、魯迅に對する長虹の不満と誤解は頂點に達した感がある。

一方、魯迅はこれに對して、「韋素園宛」(二六年十一月二十日『書信』)の中で「上海に着いて狂飆社の廣告を見て、人にこう言いました。私は『莽原』『未名』『烏合』の三種を編集したが、どれも狂飆

運動とかいうものとはなんの関係もない。投稿者もその多くは互いに知り合いではない。長虹がこのような廣告を出すのは、どうも他人を利用しすぎていると。この言葉を長虹はもう聞きつけたようで、『狂飜』で私を罵倒しています」と語っている。ここでいう「狂飜社の廣告」とは、「狂飜運動の開始はるか二年前に始まり……昨年の春、本社同人と思想界の先驅者魯迅および少數の最も進歩的な青年文學家が共同で『莽原』を發行し……ここに我々の活動を大規模なものとするために、北京出版の『烏合』、『未名』、『莽原』、『弦上』の四種以外に、特に、上海で『狂飜叢書』および比較的大型の出版物を發行するのはこびとまった」というものであった。魯迅は『未名叢刊』と『烏合叢書』までもが「狂飜運動」の仕事にされていたことに異議を唱えたのである。この廣告の掲載誌『新女性』の出版者は章錫琛である。魯迅が言った「人」は章錫琛以外に考えられない。章錫琛は開明書店の經營者でもある。『日記』によれば、八月三十一日の夜、章錫琛は再度魯迅を旅館に訪ねており、その時、魯迅の「廣告」に對する異議を聞いた可能性は、十分考えられる。章錫琛が「難癖」をつけたのは、その翌日のことである。長虹は腹を立てて『狂飜季刊』の出版を停止した。その直後、九月初めに、彼は光華書局と相談して上海版『狂飜周刊』の出版を決定した。

上海版『狂飜周刊』は二六年十月十日に創刊し、二七年一月三十日に停刊する。長虹はこれに一三五篇の文章を發表しており、ほとんどが特別欄「走到出版界」に書かれたものである。そのうち明らかに魯迅、周作人、『莽原』、『未名』等を攻撃對象としている文章は、三分の一以上にのぼる。

長虹が魯迅に對する攻撃を開始したのは、『莽原半月刊』の編集者

韋素園から、向培良の「冬天」と高歌の「剃刀」の二篇の原稿が送り返されてきたことがきっかけになった。これについては、陳漱渝が「魯迅與狂飜社」の中で解説している。概要は以下のとおりである。

一九二六年八月初め、『莽原半月刊』第一期發行前に、向培良が韋素園に「冬天」の掲載を打診した。韋素園は承諾したが、第一期まで待つようにと返事をする。一六期の編集段階で、「冬天」の頁數が多すぎたため、他の原稿との兼ね合いから向培良の別の一篇「肉底觸」を掲載することになった。第一七期編集の時に、韋素園は「冬天」を掲載するつもりであったが、廈門に發つ前の魯迅が、長くねかせていた石民の「詩二首」と譯文「凡有藝術品」、G線の「兩封信」を掲載するように指示したため、紙幅の関係からまた發表できなくなった。九月下旬、韋素園は、「冬天」が向培良の『沈悶的戲劇』に収録されて、まもなく出版されると聞き、原稿を送り返した。高歌の「剃刀」については不詳である。

長虹は十月十七日『狂飜周刊』第二期にこの「原稿のもめごと」に關して、公開書信「給魯迅先生」及び「給韋素園先生」を發表した。前者で彼は、韋素園は編集者の權威を『莽原』の同行者にまで振り回している、「あなたがこれについて何か言いたいことがあるなら、御意見をお聞きしたい」と魯迅の見解を求め、最後に「新生の『狂飜周刊』はすでに書局からあなたに直接送つてもらいました。感想はいかがなものでしょうか。……もしあなたの協力がえられるならば、我々は望外の喜びです」と魯迅の權威を必要とする胸の内をもらしている。しかし魯迅も韋素園もこれを黙殺した。その後、韋素園は何も語っていないが、魯迅は「これは少しでも常識があれば、言いようがないのは分かるはずだ。私は千里眼ではない。どうしてそんなに遠く

が見えるわけがある。私は黙っていた」と述べている。この黙殺によつて、長虹の魯迅に對する誤解は決定的なものとなり、魯迅への不満がついに爆發するのである。長虹自身も「狂瀾に對する魯迅の中立主義が、我々の友情に距離を置く第三番目の原因であつた」と述懐している。

長虹は、魯迅に出合つた頃を回想し、「私はその時、もう新しい世界に足を踏み入れたのだと思つた。それは今まで見たことのない現實の世界であつた」と述べている。當時の中國文學界で地位も名譽もある魯迅に認められ、その魯迅の許に自由に入りし、語り合える自分に、大いに自負を覺え感激した姿が認められる。それがわずか一年半のうちに、魯迅に對する評價を「出合つた當初、最も爽やかで、お互いにこの時は眞の藝術家の顔付きであつた。その後、それほど立派ではないが、しかし勇敢な戰士の顔付きであつた。更にそれ以後は世故に長けた老人の顔付きで、世故以外はほとんど何も分からなくなつていた」と變えていつたのである。

長虹は中國の方向を模索する中で、過去の思想文化を如何に捉えるかという問題に直面し、その思考の中で到達した結論について、「思想的な新青年時期」（二六年十一月十四日『文集・中』）の一文に述べている。彼は、「新青年」以降の思想が「時代を蘇生させるもの」ではなく、すでに「思想自身がその動きを止めた」と断定し、そのため「その思想は舊思想に變わり、新思想の進行の障礙となり、そこで新思想の攻撃を受けて滅ぶことになるのだ」という認識を持つに至るのである。そこで、彼は「新青年」以降の思想文化の變遷によつて生み出された成果を否定した。そして、思想文化上で「科學的な仕事」を實踐することを自己の命題とした。その實際運動の一步として、文藝

上で、「批評はまさに一種の科學である」とする現實に基づいた客觀的批評を形成しようとした。それは、思想上の「デモクラシーの精神」に依據して確立されるものだと言明したのである。

それ故、上掲の「給魯迅先生」の一文を發表して以降、魯迅の「黙殺」は「デモクラシーの精神」を壓迫する「舊思想」の「權威」と同様であると考え、更には、「狂瀾季刊」の出版を停止に追い込んだ魯迅を「權威」の象徴と見なしたと思われる。魯迅の「黙殺」は、長虹にとつて自己の存在を否定されたと同然で、自分の目的を放棄させるほどの強い精神的打撃であつたのかもしれない。二六年當時の長虹の魯迅攻撃の内容については、魯迅の「《走到出版界》的『戰略』」（文末に「魯迅剽窃」と記されている）と「新的世故」（『集外集拾遺補編』）を見れば、魯迅を「思想界の權威者」と指彈し罵倒した、人格攻撃に類するものであることが理解できる。

魯迅の反擊

魯迅には「原稿のもめごと」以降、今まで信頼し期待してきた青年に對する考え方や接し方に反省が生まれ、更に、青年に對する失望感を懷くことになる。十月二十八日の『兩地書・六二』（魯迅景宋通信集『兩地書』の原信・七三）、「湖南人民出版社、一九八四年使用」で、このように語っている。

「ここ何年か、いつも他の人のために少しは盡力してあげたいと思つていましたので、北京にいた時は、懸命になつてやり、ご飯を食べるのも忘れ、睡眠をへらし、藥を飲んで、編集や校正や文章を書きました。その結果がすべて苦い果實だとは、誰が思つたでしょう。……ちつぽけな『莽原』でさえも、私が去るとた

ちまち喧嘩です。彼ら（未名社同人を指す——筆者注）が原稿をねかせておいた（ねかせておいただけ）ため、長虹は私に難癖をつけ、しかも彼らのほうではいつも手紙をよこして、原稿がないから文章を書けと催促するしまつです。人のために一部を犠牲にしてもたりず、要するに、全てを完全に消耗しつくしてしまわなければ、放そうとしないのだということが、やっと分かりました。實に憤懣にたえず、二四號『荇原半月刊』——筆者注）で止めにするつもりです。

魯迅は長虹だけではなく、未名社の青年たちに對しても、「憤懣にたえず」と語っているのである。『兩地書』（第二集「廈門——廣州」）で、「文學青年」に對する憤懣や今まで懐いていたイメージの崩壊、更に批判的意見もかなり厳しい口調で語っている魯迅は、その一方で又、十一月十一日に書かれた「寫在《墳》后面」（『墳』）では、當時の鬱々とした心境を虚無的な筆致で綴っている。「私の生命の一部分は、すなわちこのように使い果たされたのであり、私はこのような仕事をしてきたのだ。だが、私は、今日に至つても、結局自分がずつと何をしてきたのか分からない。……要するに、過ぎ去る、過ぎ去る。一切、一切が、光陰とともに早すぎに過ぎ去り、過ぎ去りつつあり、まもなく過ぎ去ろうとしている」と。このようにして今までの生き方を自己解剖し苦惱する魯迅が、當初の「文學青年」に對する怒りと失望を、長虹に對する憎悪と輕蔑へと變化させるのは、十一月七日出版の『狂瀾周刊』第五號に長虹の「一九二六、北京出版界形勢指導圖」が掲載されてからである。

それまで、長虹の攻撃を黙殺していた魯迅はついに發言する。彼は許廣平に次のように述べる。

青年が私を攻撃したり嘲笑したりしても、私はこれまでやり返したりはしませんでした。彼らが脆弱であるか、或いは私が比較的踏みつけにされることに耐えられたからです。しかし、彼はあらゆることかどまることなく罵り続け、まるで、私が棺桶に入つたとしても、屍をも辱める勢いです。だから昨日決めました。どんな青年であろうとも二度と容赦はしない。（十一月二十日『兩地書・七九』）

魯迅は自己犠牲を徹底してきた人である。特に、社會的に自分より弱い者に對しては、自己犠牲を以て問題に當たるとするのが、魯迅の方法であつたと思う。「どんな青年であろうとも二度と容赦はしない」と斷言した魯迅は、『走到出版界』的『戰略』（十二月二十二日）によつて、反撃に出た。この一文は、自分の言葉では何も語らず、長虹の言葉で彼の正體を語らせるといふ方法で書かれたものである。魯迅がこの中で「剽窃」した長虹の文章は、『狂瀾周刊』第一號（十月十日出版、長虹からの贈呈、該號以外は、長虹が贈呈したといふ記事は長虹の文章から確認できない）、第二號（十月十七日）、第五號（十一月七日）、第十號（十二月十二日）に掲載されている。しかし、魯迅は『狂瀾周刊』を入手したといふ記載を、全く『日記』に残してはいない。このように雑誌の購入・閲覽の記載が『日記』にないといふことは、二五年五月以降、女師大事件に端を發して、『甲寅』、『現代評論』の主筆である章士釗、陳源等と論争した時の『日記』も同様であつたことを想起させる。長虹の魯迅に對する攻撃は、これまでの自己の姿勢に轉換を迫るものとなつた。『走到出版界』的『戰略』の最後は、長虹の「公理與正義的談話」（『狂瀾周刊』第十號）の一節「公理：私は相手の流儀で相手に報いる」で締めくくられている。これは、長虹に對

する反撃の方法の表明であるが、これもまた、魯迅が章士釗、陳源等と論争した時と同様の方法である。魯迅の長虹に對する憎悪と輕蔑は、章士釗、陳源等に向けられたものと同質のものであつたのかもれない。

十二月二十四日に書いた「新的世故」にもこの方法が貴かれてゐる。この文章の前半部分は、「《走到出版界》的『戰略』と同様に、長虹の文章を『剽窃』し、その中に魯迅流の風刺が込められている。後半部分は、その前半部分と『《走到出版界》的『戰略』で『剽窃』した事實を踏まえた上で、長虹に對する反論を總括的に述べてゐる。

「最もうんざりするものは、うるさくまとわりつくことだ。……わざわざ人の背後に回つてきて、突然、先驅けだとしてみたり、突然、足枷だと非難したりするなら、それこそ『家に籠もつていても、天から禍が降つてくる』というものだ」。又、長虹の人物については、「ああだこうだとうるさくまとわりつき、他人は一切眼中になく、あるのは己ただ一人、私を無理矢理、自分好みの人物に仕立てようとする」と述べ、最後に、長虹の失敗は「内にはあまりにうわべを飾ろうとしたためであり、外にはあまりに先驅を頼りすぎた、或いは利用しすぎたためである」と結論づける。

とりわけ、魯迅が長虹を卑劣極まりないと憤慨した理由は、十一月二十日の『兩地書・七九』によく表されている。「長虹は、私の章士釗に對する敗北を笑つて『そこでついに紙製の『思想界の權威者』というニセの冠を被り、心身ともに病む状態に陥つた』と言つています。しかし、彼は八月に『新女性』に廣告を載せ、なんと、『思想界の先驅者魯迅と共同で『莽原』を出版』と言つてゐるのです。自分で、私に『ニセの冠』を被せて人を騙しておきながら、また他人が被

せた『ニセの冠』で私を罵る。まことに輕薄卑劣、人間らしい様子もありません」。二五年八月四日から六日にかけて、北京の『民報』が副刊増設にあつて、廣告を載せた。そこに「思想界の權威者魯迅……」の文字を見た長虹は、「私はそれを見て、本當に耳にするにも汚らわしく、またひどく哀れで、そのうえ吐き氣を感じた」と述べた。だが、その長虹が二六年八月の『新女性』掲載の「狂飆社の廣告」で「思想界の先驅者魯迅……」の文字を使つてゐるのである。

魯迅はこの時、この廣告の内容に異議を唱えた。これについて、十二月二十四日に書いた「新的世故」で「他人が載せた廣告さえも、私の罪状になつた。しかし當の本人は、やはり廣告で私に一つの肩書きを押しつけていたのだ」と述べ、更に「私は黨同にして伐異だ。『私の利を圖る』が『公の名を借り』はしない。自分の努力を切り賣りするが、すべてを犠牲にはしない。自分を賣ることはあつても、友人は賣らない。これでもよいと思ふ者は、往來してもよい。いやだと思ふ者は、おいでいただく必要はない。策略の同情もいらぬし、ましてや心からの友情とやらを恵んでくれる人はいらぬ。簡單明瞭、これだけのことだ」と、この三ヶ月にわたる長虹の攻撃に對して、魯迅はまるで蓄積された鬱憤を吐き出すかのように明言してゐる。

魯迅がこの二篇の原稿を北京の李小峰に送つたのは十二月二十七日『日記』である。ところが、翌二十八日に韋素園からの手紙で「給——」詩の噂を知る。この詩は、二六年十一月二十七日上海版『狂飆周刊』第七期に載つた「給——」詩(第二八首)である。魯迅は、「彼(韋素園—筆者注)は沈鐘社で聞いたのだが、長虹が懸命に私を攻撃するのは一人の女性のためで、『狂飆周刊』に詩を一首書いて、太陽を自分になぞらえ、私は夜で、月は彼女だと言ふのです。……こうし

た流言（許廣平が魯迅の戀人だ―筆者注）はとつくにあつて、傳播したのは品青、伏園、亥倩（章衣華）、微風（李小峰）、宴太（周作人の妻、羽太信子）だということをはじめて知りました。ある者たちはまた、私が彼女をつれて廈門へ行つたとも言つています（二七年一月十一日『兩地書・一一二』）と許廣平に知らせている。そして十二月二十九日『韋素園宛』（『書信』）で噂の理由を「一、だれかの神經過敏な推測によるもの」、「二、『狂飜』社の連中がわざと尻馬にのつて宣傳し、私を攻撃する別の一法としてゐること」、「三、長虹が、しんそこ、私が彼の夢をこわしたのだと疑つてゐること」……長虹はおそらく北京にいた時、彼女にさまざまな企てを試みたが成功しなかつたのは、私が間に立つて邪魔だつたからだと思つてゐるのでしよう」と擧げ、更に「むしろこれからは、彼がいつたいどんな夢をみているのか子細に研究し、いつそのこと自分の手でこなごなに引き裂いてやり、いっそ痛哭流涕させてやりたいものだ」とさえおもう。わたしが嫌がらせをしてやろうと決意させかためれば、いかなる太陽の類であろうとも、ものの數ではない」とその怒りを露わにしているのである。

魯迅は、長虹の攻撃の背後に、『狂飜季刊』の出版停止を導いた「狂飜社の廣告」に對する自分の發言が、「たぶんあとで、それが彼の耳に入った」ということと、長虹の許廣平に對する感情的屈折が存在し、それが「給」詩創作につながつたと考えたようである。魯迅をこのように激怒させたのは、「給」詩の噂に、許廣平が取り沙汰されたことが許せなかつたからだと思われ。

これ以後、「奔月」（一九二六年十二月作と文末に記す、『故事新編』が、二十八日に「給」詩の噂を知つた直後に書き上げられ、二七年一月四日、韋素園に原稿を送つてゐる『日記』。文中で「まったく、お

前も百何回と無駄足を運んだものだ」「即ちその人の道を以て、その人の身に返す」「たいした歳でもないのに老人ぶるようじゃ思想の墮落だ」など、長虹が魯迅攻撃で使つた言葉を逆用し、「彼をちよつとからかい」（二七年一月十一日『兩地書・一一二』）、嘲笑してゐる。又、上海の新月書店の目録に、陳西澄（陳源）著『西澄閑話』（二八年三月出版）の單行本出版の廣告が載つたのだが、魯迅は二七年九月初めにそれを眼にして、「最も憎むべきことは、『閑話』の廣告で、私を『語絲派の首領』にまつりあげ、かつて『現代派の主將』陳西澄と一戦を交えたことがあり、およそ『華蓋集』を讀む者はみんな『閑話』を讀むべきだ云々、と言つてゐることです」（九月十九日「韋廷謙宛」『書信』）と述べてゐる。魯迅はこの時期に、現代評論派を攻撃した雜文にも、長虹が魯迅を攻撃した言葉を逆用してゐる。魯迅は「ああ、魯迅、魯迅、どれだけの廣告が、お前の名を借りてまかり通ることか！」と書き、よほど「廣告」には腹立たしい思いをしたものと見える。

魯迅の決意

長虹の攻撃は魯迅に自分のこれまでの生活を反省させるきつかけとなつた。魯迅は、人のために自己を犠牲にしてきた生き方から自分を解放し、今までの生活から脱却して、眞正面から自己の求めるものに向き合い追求していく姿勢を取り始めた。

『兩地書』を讀むと、確かに、許廣平の方には、北京を發つ時から魯迅との愛情問題に迷いはなかつたと思われるが、魯迅の方には、ためらい迷ひ、躊躇する様子が窺える。しかし、上述のように、十二月二十八日に韋素園からの手紙を受け取つてからは、魯迅の心境に變化が生じた。二七年一月十一日の『兩地書・一一二』で長虹をはつきり

と意識して宣言する。次の引用は、前節で觸れた「流言」の傳播に言及した箇所の直前に述べられている部分である。

たんにこの三、四年のあいだでも、よく識つた、またはじめて識り合つた文學青年たちに、私がどうであつたか、盡力できるところがありさえすれば盡力し、決してどんな悪意もいじかなかつた。しかし男ときたら、彼らは自分たちのあいだでさえ嫉妬をかくせず、とうとう喧嘩をはじめ、片一方のほうに助力を得られないようから、私を打ち殺し、もう一方のほうに助力を得られないようにしようとしたのです。……以前はたまに愛ということに考えがおよぶと、たちまち自分自身が恥ずかしく、その資格がないだらうと思ひ、そのためある人を愛する勇氣がありませんでした。だが、彼らの思想言行の内幕を見きわめたことは、私に自信を與えました。自分は決してそんなにまで自分を貶め抑えるにおよばぬ人間である、私は愛することができるとだ。

これまでも言われてきたが、これこそ、自らを自己犠牲という呪縛から解放し、過去の生活に對して別離を宣言したものであり、許廣平との愛に生きることの魯迅の表明であつた。この言葉を魯迅に言わせるきっかけとなつたのは、長虹の魯迅攻撃であつた。

魯迅が許廣平との愛情問題⁽⁸⁾で最もためらい、悩んだのは北京に残してきた朱安夫人のことである。朱安夫人にとつては、たとえ彼女が形式的な妻であろうとも、魯迅と許廣平の愛情問題は、苦痛と悲哀以外のなものでもなかつたはずである。更に、魯迅には、許廣平との愛情問題に決断を下すことによつて生ずる社會の、とりわけ周作人一家の嘲罵・叱責及びそれがもたらす「戰士」として闘い続けるための社會的基盤の崩壞、特にそのことによつて、許廣平をも巻き込み、彼女

の一生を犠牲にするかもしれないということを考慮しなければならなかつた。これらのことは、いつも魯迅の意識から離れず、自らの行動を束縛し、彼に自己犠牲の生活からの脱却を阻んだ所以のものなのである。そのような魯迅が、將來への希望を託し信じていた青年、それも協力して『莽原周刊』を編集發行していた青年に裏切られ、その青年の本質を見きわめた時、彼は一人の人間として自分自身と向き合つた。それは、もはや自分の中に將來を擔う力が存在しないと断念して魯迅が、自分の中にその力が存在するのを確認し、將來への希望を見いだしたことを意味しているのである。そして、魯迅は人のために生きるのではなく、自分自身のために生きる道を選んだ。それは魯迅の自己實現への決意を意味した。

その後、「私は廈門を離れたとき、ものの考え方がすでにいくらか變化してゐた」と魯迅は述べ、更に廣東での經驗を踏まえて、次のように自らの思想的轉換をふり返つてゐる。

私はずつと進化論を信じ、將來はかならず過去に優り、青年はかならず老人に優ると思つてゐた。青年に對しては、尊重を心がけてきたから、よく十刀を浴びせられても、一矢しか返上しなかつた。けれどもその後、私は自分の考え方がまちがつてゐたことがわかつた。

魯迅の進化論に對する確信が搖らぎ始め、修復不可能なまでに龜裂を生じていく精神的過程は、二四年、二五年に書かれた『彷徨』、『野草』に收められた文章に表現されている。廈門の時期は魯迅のこのよきな思想上の轉換點にあたる。長虹との論争を通して、ここで、魯迅が中國の將來を擔う力だと信じていた青年に對する信頼が、大きく崩れ去つた。長虹の魯迅攻撃は、その轉換を魯迅にもたらしたものであ

る。魯迅は、長虹への怒りをバネにして、自己犠牲の呪縛から自己を解放する自信を培ったのである。魯迅は過去の生活を反省し自己解剖を深め、ようやく今まで自分の中に閉じこめてきた自己實現を決意するに至った。それが、許廣平への愛の宣言となつたのである。

注

(1) 『高長虹文集』(上・中・下三卷本)、山西省孟縣政協《高長虹文集》編集委員會編、一九八九年十二月第一版。尙、本稿で引用する高長虹の文章は本文集を使用する(以下、『文集』と略記)。又、『恩怨錄・魯迅和他的論敵文選』(李富根・劉洪主編、今日中國出版社、一九九六年十一月)上巻にも、高長虹の文章が若干収録されている。

(2) 錢理群「從高長虹與二周論爭中看到的」、高遠東「自由與權威的失衡——高長虹與魯迅衝突的思想原因一解」、『魯迅研究月刊』、一九九〇年第五期、北京魯迅博物館出版。兩氏の論文は中國現代文學史における思想文化の「典型的事象」と位置づけている。その觀點から考えると、長虹と魯迅の論爭は、二八年の革命文學論爭(丸山昇『魯迅と革命文學』紀伊國屋書店、一八七二年一月參照)の近似的縮圖と言えるかもしれない。これについては、今後の課題としたい。

(3) 新聞記事から見た女師大事件については、拙文「新聞に見える女師大事件及び中國教育界の動き①」、『呻啞』二三號(昭和六二年九月)、「女師大事件をめぐる二つの訴訟」、『關西大學中國文學會紀要』十一號(平成二年三月二十日)と「京報・順天時報・時報——女師大事件目錄」、『呻啞』二六號(平成二年二月二十三日)に詳述。本稿が資料として使用したものは、『京報』(一九二五年一月から五月)の記事にある。尙、陳漱渝『魯迅與女師大學生運動』(北京人民出版社、一九七八年二月)では、一九二五年五月以降の『京報』を資料としている。

(4) 『京報』掲載の楊蔭榆の罪状は、九項目によりその内容を詳述している。以下には、項目のみを列挙する。一、如教務會議平議會之藉便私圖、則棄廢各級主任而濫用員司。二、如學校經費之欲飽私囊、則違章徵收、而剝削寒酸。三、碩學宿儒、以異己而排斥之。四、朽木樗櫟、以私誼竟登席焉。五、同罪而異其賞罰、學生以愛者爲優劣。六、市恩而代繳學費、學生復利祿是誘惑。七、其尤倒行逆施者、則舞弊營私、破壞收生。八、溺職虛應、徒事敷衍。九、頭腦冬烘、居心殘酷。

(5) 『美專風潮紀實』によると、民國十二年(一九二三)から、教員が西洋畫と日本畫の二派に分かれて、學生をも巻き込んだ權力闘争を繰り廣げていた。教育部も再三仲裁に入るが、決着がつかず、最終的には、教育部が派遣した新校長餘紹宋を、學生が拒絶し、教育部は部令に違反したとして、武装介入によつて學校閉鎖を行つたということである。

(6) 『通訊』二五年三月二十九日、『華蓋集』『魯迅全集』(人民文學出版社、一九八一年)以下、『全集』と略記)三卷、二四頁。

(7) 『給魯迅先生』二六年十月十日、『文集・中』一一二頁。

(8) 『民衆文藝週刊』は二四年十二月九日創刊、毎週火曜日發行、胡也頻、由項拙、荊有麟が編集を擔當(陳漱渝「魯迅北京時期與一些報刊的關係」『魯迅在北京』、天津人民出版社、一九七八年十二月、五四頁)。「莽原週刊」發刊時のメンバーで發刊計畫をよく知り、又京報館と關係があつたのは荊有麟一人である。

(9) 言行「高長虹傳略」『新文學史料』第四期、一九二頁、人民文學出版社、一九九〇年十一月。

(10) 高長虹は「狂瀾運動」を、當時若いゲートを中心とする文學運動の名となつた、クリンガー(Friedrich Maximilian von Klinger) (一七五二—一八三三)・ドイツの劇作家・小説家)の初期の戯曲《シユートルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)》(一七七六)の運動にならつて名付けた。「狂瀾運動」はほぼ北京と上海の時期に二分される。北京の時

期は、『狂飜周刊』(二四年十一月九日—二五年三月二十二日)と『海上周刊』(二六年二月十四日—八月一日)の發行が主な活動である。上海時期の活動としては、二六年九月に設立した狂飜社から『狂飜周刊』(十月十日—二七年一月三十日・光華書局)を發行し、この間、三種類の『狂飜叢書』を創刊、二八年には、四月に上海狂飜出版部を、十一月に狂飜演劇部を作り、十月に『長虹周刊』を創刊するなど活動は多方面に及んだ。

- (11) 前出「給魯迅先生」『文集・中』、一二一頁。
- (12) 「一九二六、北京出版界形勢指掌圖」『文集・中』、一四九頁。
- (13) 李露野「記未名社」『魯迅先生與未名社』、湖南人民出版社、一九八〇年七月、一八七頁。
- (14) 前出「記未名社」、一八三頁、一八七頁。
- (15) 「憶韋素園君」三四年七月十六日、『且介亭雜文』『全集』六卷、六三頁。
- (16) 「未有天才之前」二四年一月十七日、『墓』『全集』一卷、一六九頁。
- (17) 「新時代的消息」『文集・中』、二〇三頁、日付なし。
- (18) 「批評工作的開始」二六年十月十九日、『文集・上』、三九九頁。
- (19) 言行「高長虹傳略」、一九三頁。尙、『中國現代文學期刊目錄彙編・上』(中國現代文學書刊資料叢書、天津人民出版社、一九八八年九月、七〇九頁)の『莽原周刊』第三期(全三二期中)の目錄に「長虹作、矛盾園(一一二)」とあるが、『文集』に同名の作品は見えない。
- (20) 前出「給魯迅先生」『文集・中』、一二〇頁。又、魯迅も未名社同人の閉鎖性を賞感していたようで、一九三一年十月二十七日「致曹靖華」『書信』『全集』一二卷、五九頁)で「北京在住の數名がこれまで新しい仲間を受け入れようとしなかった」と指摘している。
- (21) 原文は「我同章錫琛一道去旅館裏看他、也許因爲旅行關係、他的感情很不平靜。……那時、已經同章錫琛講好出版狂飜季刊、已經就到

魯迅と高長虹

交創刊號の稿子の時候了。不料次日看見章錫琛的時候、他留難起來、讓先出版一期看看。這天魯迅已經走了、我當時感情很激越的、就把狂飜季刊出版的計劃立刻停止了。」一點回憶——關於魯迅和我』四〇年七月二十六日、『文集・下』、五二一頁。

- (22) 「所謂「思想界先驅者」魯迅啓示」『華蓋集續編的續編』『全集』三卷、三九一頁。略號は引用文のまま。原載は『新女性』月刊一卷八號(一九二六年八月)、未見。
- (23) 「新的世故」『集外集拾遺補編』『全集』八卷、一五三頁。
- (24) 陳漱渝「魯迅史實新探」、一七一頁、湖南人民出版社、一九八〇年九月。尙、向培良も「冬天」の不掲載について以下の文章で觸れている。「『爲什麼同魯迅鬧得這樣凶?』『狂飜周刊』一七期、一九二七年一月三十日(一九一三—一九八三魯迅研究學術論著資料彙編・第一期)、中國社會科學院文學研究所魯迅研究室編、中國文聯出版、一九九〇年七月に收録) 參照。
- (25) 前出「新的世故」『集外集拾遺補編』『全集』八卷、一五三頁。
- (26) 前出「一點回憶——關於魯迅和我」『文集・下』、五二〇頁。同文で、長虹は魯迅との決裂の原因を三點指摘している。第一は、長虹が二五年九月、第二部詩集『閃光』(北京貧民藝術團編集・永華印刷場印行)を自費出版したことにあとと述べている。當時、魯迅は文藝上で新しい派閥を作ろうと考えていたため、魯迅編集の烏合叢書の一つとして、『閃光』を出版するつもりであったが、長虹が魯迅に相談せず自費出版したことによって、魯迅との間に感情的龜裂が生じたことと長虹は考えていた。第二は、長虹が許廣平と手紙のやりとりをしたことと述べている。
- (27) 前出「一九二六、北京出版界形勢指掌圖」『文集・中』、一四六頁。
- (28) 前出「一九二六、北京出版界形勢指掌圖」『文集・中』、一四六頁。
- (29) 「取消批評工作」『文集・中』、二三四頁、日付なし。

(30) 『《走到出版界》的「戰略」』『集外集拾遺補編』『魯迅全集』十卷(學
習研究社發行、昭和六年八月、須藤洋一譯)の譯注(六)を参照。

(31) 前出「一九二六、北京出版界形勢指掌圖」『文集・中』一五五頁。

尙、高遠東は「權威」に對する魯迅と長虹の認識の相違について、「自由與權威的失衡——高長虹與魯迅衝突的思想原因一解」(前出『魯迅研究月報』四〇頁)の中で、魯迅は、「眞の權威は必ず人に服膺させる力を含んでおり、どんな形の強制や壓迫も排斥する」ものであると理解していたが、長虹は、「權威の關係を一種の奴隸の關係であると見なし、ていた」と分析している。

(32) 「高長虹年表」『文集・下』、『狂瀾周刊』第七期に愛情詩シリーズ「給——」一首を掲載した。その後、北京の文壇で流言が廣まり、韋素園がこの事を廈門の魯迅に報告し、魯迅の長虹に對する誤解と不滿を引き起こした」と記述している。

(33) 「給——」『文集・上』三三四頁。第二八首は次のようである。「我在天運行走、月兒向我點首、我是白日的兒子、月兒呵、請你住口/我在天運行走、夜做了我的門徒、月兒我交給他了、我交給夜去消受/夜是陰冷黑暗、月兒逃出在白天、祇剩着今日的形骸、失却了當年的風光/我在天運行走、太陽是我的朋友、月兒我交給他了、帶她向夜歸去/夜是陰冷黑暗、他嫉妒那太陽、太陽丟開他走了、從此再未相見/我在天運行走、月兒又向我點首、我是白日的兒子、月兒呵、請你住口」。尙、董大中は「談談高長虹『月亮』詩」(『名作欣賞』一九九〇年第六號、山西人民出版社、六〇頁)の中で、この二八首は第二六、二七首との連續性でとらえるべきであり、長虹の詩作方法は「否定的意味合いの言葉を使って、自己を描寫し、自己を比喩する」ところがあると述べた上で、「この詩を魯迅に對する『攻撃』とするのは、なんとも無理なことである」と付け加えている。又、閻繼經「重評『月亮詩』(未刊稿)」(陳漱渝編『魯迅論爭集・上』中國社會科學出版社、一九九八年九

月)は、魯迅との對立をも視野に入れ、董大中と同趣旨の論評をして

いる。

(34) 「韋素園宛」二六年十二月五日、『書信』『全集』十一卷、五一—三頁。

(35) 「奔月」『全集』二卷、三六三—三六七頁。尙、魯迅が文章の中で長虹の言葉を逆用して長虹を嘲笑したものに、以下の作品がある。「阿Q 正傳的成因」二六年十二月三日、「廈門通信三」十二月三十一日、「海上通信」二七年一月十六日(『華蓋集續編的續編』『全集』三卷)、「新時代的放債法」二七年九月十四日、『而已集』『全集』三卷、「甲與賀」二七年十二月四日、『三閑集』『全集』四卷等。

(36) 「辭『大義』」二七年九月三日、『而已集』『全集』三卷、四六二頁。

(37) 許廣平への愛情に對する抑壓を解くにいたった経緯についての指摘は、日本では、木山英雄の『野草』的形成の論理ならびに方法について—魯迅の詩と『哲學』の時代(『東洋文化研究所紀要』三〇、一九六三年)に、中國では、王得后の『《兩地書》研究』(天津人民出版社、一九八二年)に始まり、他にも種々言及されている。

(38) 拙文「魯迅にあたえた朱安夫人の影響——「家」との關係をめぐって」『東洋大學大學院紀要』二〇集、昭和五九年二月に既述。

(39) 俞芳「我記憶中的魯迅先生」浙江人民出版社、一九八一年十月參照。

(40) 「答有恒先生」二七年九月四日、『而已集』『全集』三卷、四五—三頁。

(41) 「序言」『三閑集』『全集』四卷、五頁。